久元さんはセレモアコンサートホール武蔵野でピアノをレッスン。このホールはオリジナルの歴史的名器を所蔵し、プレイエル（手前／PLEYEL 1843年製作）はパリでショパンが愛用した楽器として知られ典雅で柔らかな音色、エラール（奥／ERARD 1868年製作）はリストの時代に製作され、宝石の輝きのような高貴な音色が特徴。ここでのコンサートでは19世紀のパリの響きを楽しめる。

旅を愛し、人生を感性で磨く素敵な女性

心を奏でるピアノ

モーツァルトのレクチャー・コンサートなど、音楽を多面的に捉えた演奏会で注目を集めているピアニストの久元祐子さん。著書も多く、文筆家としても活躍する、久元さんの魅力あふれるライフスタイルをご紹介しよう。

Photograph:Hisashi Miyakawa

「水か風か火か土か」

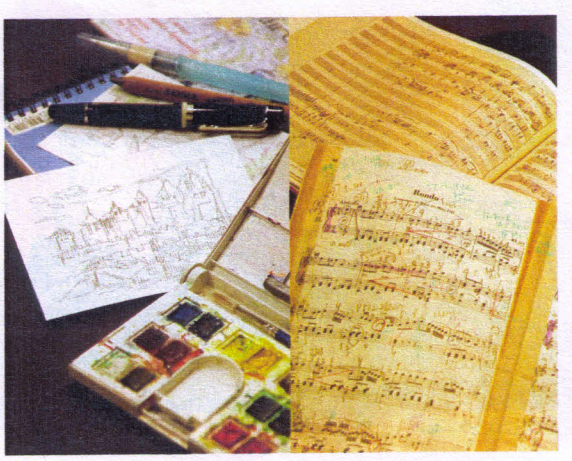
ピアニストとして日本各地や海外でコンサートを開催し、国立音楽大学の講師と日本ラトヴィア音楽協会理事を務め、放送番組にも出演、そして時間の合い間をぬうように文筆を勤しむ久元祐子さん。日々を精力的にこなす彼女にストレス解消法を伺ったときの言葉だ。

「例えば海辺で波の音に聴き入ったり、自然の豊かさに触れて、自分の体の内なる声に耳を傾け、心身を本来持っている自然な状態に戻すのです」

アーティストとして道を究め、多彩な活動を続ける久元さんだが、その素顔はとても穏やかで、まるでシルクのシフォンをまとったかのような雰囲気が漂う。子供の頃はとても引っ込み思案で、言葉以外の表現方法としてピアノを選んだのだろうと言う。

「モーツァルトは初恋の人。最初に聴いたクラシックがモーツァルトで、その透き通った綺麗な音色の世界に魅了されて、レコード盤が擦り切れるほど聴き入りました。メロディーは心模様を映し出し、今でも私にとって希望の光の先にある星のような存在です」

研鑽を重ねてピアニストとしてデビュー。以降、世界各国で演奏会を催している久元さんが忘れら



右／モーツァルトの自筆譜を写した楽譜は、大切な心の支え。レッスン用の楽譜には注意したい点を細かく書き込む。左／サンポン村での宿泊先の画家の主人の勧めでデッサンを始めた。演奏旅行には必ず携帯し、旅先の風景を描き絵葉書として送ることもある。

久元祐子（ひさもとゆうこ）／ピアニスト

東京芸術大学大学院ピアノ科修了。東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、ラトヴィア国立交響楽団、札幌交響楽団、テレマン室内管弦楽団、ベルリン弦楽四重奏団などと協演。NHK.FM「名曲リサイタル」などにも出演。CD『名曲による「花束」』『久元祐子・ショパンリサイタル』『リスト：巡礼の年第2年「イタリア」』『ノスタルジア・懐かしい風景』などをリリース。著書に『作曲家別ピアノ演奏法』（ショパン）、『モーツァルト・18世紀ミュージシャンの青春』（知玄舎）、『モーツァルトはどう弾いたか』（丸善出版）などがある。国立音楽大学講師、日本ラトヴィア音楽協会理事、セレモアコンサートホール武蔵野顧問。www.asahi-net.or.jp/~ch5y-hsmt/

・２００８年４月１５日（火）
指揮：小林　研一郎氏
ピアノ：久元　祐子
日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール
「皇帝」＆「運命」他
・８月には、音楽之友社より
「モーツァルトのピアノ音楽研究」、
ショパンより
「作曲家別演奏法」を刊行予定。
・９月１日（月）
久元　祐子ピアノリサイタル
東京文化会館
・１２月５日（金）
指揮：飯森　範親
ピアノ：久元　祐子
神奈川フィルハーモニー管弦楽団
横浜みなとみらいホール
モーツァルト　Ｋ４８８　他

・詳細は久元　祐子ウェブサイトに
掲載。（Yahoo などで久元祐子と検索）

モーツァルト・イヤーの2006年は多忙を極めた。金聖響指揮、東京フィルハーモニー交響楽団と紀尾井ホールにて。

れないのが、ラトヴィア国立交響楽団とモーツァルトのコンチェルトを協演した、ラトヴィア共和国の首都リガでのコンサートだ。

「そのコンサートが開催されたのは1991年4月、正にラトヴィアがソ連から独立しようというとき。1月には惨事が起こり、厳しい政治的状況下にあったにもかかわらず、ソ連政府の関係機関からピアニストとして招かれた私を温かく迎え入れてくれたのです。ラトヴィアの方々が心から演奏を楽しんでいるのが実感され、コンサートは大成功。音楽が国境を超え、人々の心をつなぐ共通言語であることを心の底から痛感しました。バルト三国のラトヴィアはメルヘンの世界のように美しい国で、人々は合唱で愛国心を表現するなど、音楽をとても大切にしています。日本との交流をもっと深めたいと、日本ラトヴィア音楽協会の理事を引き受けています」

クラシックを多面的に楽しんでほしいとレクチャー・コンサートを開催

いろいろなスタイルの演奏会を催している久元さんが、10年以上定期的に続けて注目を集めているのがレクチャー・コンサート。主にモーツァルトとその時代に生きた作曲家を取り上げて、クラシック初心者が楽しめる話やモーツァルト愛好家でも堪能できる内容など、様々なエピソードを交えながら演奏を行うスタイルだ。

「ゲストをお迎えしての対談コンサートや、ムソルグスキーのピアノ組曲『展覧会の絵』のインスピレーションのもとになったといわれる絵と一緒に鑑賞したり、チャイコフスキーの『四季』は月刊誌の付録として作曲された曲で、付録の中に付記されていた詩を朗読しながら演奏を楽しんだり、ワインをテーマにワイン・レクチャーと共に縁（ゆかり）の曲を弾いたりと、音楽以外の芸術も一緒にステージに乗せて楽しんでいただこうと始めました」

ピアニストとしてピアノを弾き込むレッスンは不可欠なことだけれど、絵画や名建築物を鑑賞するなど、様々な芸術に触れて五感を磨くことがとても大切と語る。趣味の乗馬は相手の気持ちを思いやる心を養うためのものと言う。

「南仏のサンポンという小さな村で幼稚園児たちのためのコンサートを開いたとき、演奏が始まったとたんに騒がしかった会場がしーんと静かになって…、メロディアスな曲には静かに聴き入り、アップテンポな曲に変わるとリズミカルに心躍らせているのが伝わってきました。音楽には年齢も国境も言葉の違いも全く関係ないのです。ピアノは1台1台、それぞれに違う個性を持っています。ピアノと対話をしながらその特性を最大限に生かし、愛情や思いやり、夢などを、名曲の音色に託して世界中の皆様と共有できれば幸せです」

右／疲れを感じたら郊外へ。自然の豊かさに包まれると、心からリラックスできると言う。中／1991年リガでのコンサートのときに、ラトヴィア国立交響楽団のディレクターと一緒に。左／浜離宮朝日ホールにてムソルグスキーの作品をテーマにレクチャー・コンサートを開催。